ムソビシの時代：1821年－1842年のシャムによるクダー占領期（part.1）

黒田 景子

キーワード: クダー、ナコンシータマラート、シャム史、マレー史

要旨

本稿は1821年に始まるナコンシータマラートによるクダー侵攻とその占領期を対象としている。この研究はマレー語、英語、タイ語による多言語史料を用いて双方の記述の比較検討を行い、事件の真相を詳述する。 原稿の分量が多いために、原稿は二部に分ける。ここでは前半を記載する。

クダーはマレー半島の中継港市国家でありスルタンの支配するイスラーム国家である。しかし、仏教的支配原理を国是とするシャム・アユタヤ朝に朝貢するいくつかのマレー系港市の一つであった。イスラーム化とシャムへの朝貢開始の時期はおそらく15世紀であろうと言われている。シャムがクダーを朝貢国として保持していた理由はこの地域が東海岸のパタニ王国とともに、東西交易の拠点であり、巨大港市国家であるアユタヤにとって重要な交易ネットワークの拠点であったからにほかならない。シャムのマレー半島部においてはナコンシータマラート（リゴール）が古来から重要な交易拠点、軍事拠点であり、マレー系朝貢国を監督し見張る役を担っていた。1768年にシャム・アユタヤ朝がビルマによって崩壊した後、シャムの王朝を復活させたトンブリーのタークシン王は華人交易の利益を重視して国の再建を目指し、ソンクラーに福建華人商人の一族を支配者として置いた。その後ラタナコーシン朝のラーマ１世はクダーやパタニとの朝貢関係を復活させるとともに、同じく交易収入を重視してソンクラーをナコンシータマラートと同地位に昇格させた。その結果、両者は交易と、シャム中央宮廷内での政争においてライバルとなった。両者の争いはクダーの沖のペナン島に根拠地をおいた英国東インド会社という新たな港市との交易利権を巡って激烈になった。

その一方、1809年までに南タイは何度もビルマからの攻撃を受けて中央宮廷直轄のタラーン港市群は壊滅的打撃を受けた。1811年にナコンシータマラートの国主に就任したノーイは軍事力に劣るソンクラーを退けてペナンにつながる交易利権を求めて、その勢力をタラーン港市群やトラン等に拡大した。その中で最も露骨な干渉が、クダーの占領である。ナコンシータマラートはクダーのスルタン一族の内紛を利用して1821年にクダーに侵入して占領し、これを1842年まで直接支配下においた。（以上前半 part.1）

本文

Ⅰ　はじめに

本稿はマレー半島のクダー（Kedah）が1821年にシャム[1]王国の有力港市ナコンシータマラート（Nakhon Si Thammarat　以下ナコンと略す）に奇襲占領された1821年から1842年の事件を扱う。クダーはマレー人スルタンによるイスラーム侯国であり、シャムの朝貢国であったが、このとき初めて仏教徒による支配を経験した。クダーの人々はシャムの侵入とそれに対する苦難と抵抗の歴史を「ムソビシの時代」と呼んで記録、記憶している。ムソビシ（Musuh Bisik）とはマレー語で「敵の来襲を囁く（Whispering Enemy）という意味であり、クダーの人々にとっては1821年11月12日にシャム軍がクアラクダー（Kuala Kedah）を襲撃し、クダー民衆が慌ててその情報を伝えて避難した故事に由来する。

この襲撃で、クダースルタンのアフマッド・タジュッディン・ハリム・シャー２世（Ahmad Tajuddin Halim Shah II）はペナンの英国東インド会社（EIC）のもとに逃げ込み、多数のクダー難民が英国領のペナン島と対岸のウェルズレイ地方（現在の Seberang Perai）に入った。EIC は交易と治安の保障のためシャムとの外交的対応を迫られた。また、クダーを追われたスルタンやその親族、民衆はクダーの奪還を目的として大小の抵抗運動を起こした。クダーのマレー人村落では当時の戦いの記憶、抵抗した英雄の記憶や伝承が残り、いまなお「語り（ナラティブ）」として現地で聞くことができる。

ムソビシに関する先行研究は交易と外交関係に焦点が偏りがちである。それは EIC の官吏による豊富な英語の報告書による英国植民史の外交史研究として定番になっているからである。反面、現地語史料、さらに民衆の口伝史料を検討した研究は殆どない。本稿では「ムソビシの時代」をマレー語史料やタイ語史料を用いて史実の再検討をおこない、この事件がシャムとクダーの双方の視点からはどう位置づけられるか考察する。

この事件の当事者である EIC の官吏、Anderson、Low、Crawfurd、Burney らの報告は真っ先にシャムとクダーが主従関係にあるかどうかを問題とし、EIC は「誰と」交渉するべきかを巡って、限られた時間で現場の判断に頼った混乱を呈した。シャム王宮に交渉に向かった Crawfurd や Burney がクダーはシャムに属すると判断したのに対し、Anderson はクダーの独立国説をとり、1824年にその立場から論を出版したが、ペナン政府（EIC）に不利な証言をしたという理由で没収焼却された。またこの事件を「ケダー戦争」として取り扱った1943年の信夫清三郎の『ラッフルズ伝』は、日本が欧米との戦いに突き進んでいく中で「敵を褒めすぎている」という理由で発禁になった。いずれも、時代を経て改めて復刻された[2]。

1971年の Bonney や1985年の Gullick の論考も EIC 資料を基にしており、ムソビシの時代をクダーの民衆がどう生きたのかについては焦点は当てられていない。マレーシアの Kubkua Swannathat-Pian の1988年の著作は、タイ語と英語とマレー語史料によってシャムのマレー系朝貢国の18世紀から19世紀半ばまでの状況を分析しているが、この研究の焦点も政治史と支配層の動きに限定されている。タイ史料の扱いも十分ではない。マレー語による研究としては、Wan Yahaya の Salasilah atau Tarikh kerajaan Kedah（1911）に当該期のマレー村落の首長についての若干の記述がある。クダーの地方史家であった Ismail Haji Saleh が Konvensyen Sejarah

[1] 本稿ではタイ（Thai）国の1939年の国名変更以前の国名シャムと表記する。またナコンシータマラート（Nakhon Si Thammarat）は、サンスクリット語の Negara Sri Dharma Raja に由来し、シャムでは「ナコン」と省略して呼ばれる。ここでは、字数の都合上適宜ナコンと表記する。「Nakhon」の音韻変化により Ligor としても知られる

[2] Anderson の著作はその後、Journal of Indian Archipelago vol.8（1854）と vol.10（1856）に、また書籍として Journal of Royal Asiatic Society of Malayan Branch（MBRAS）から1989に再発行されている。

Negeri Kedah（クダー史学会大会）でムソビシについての聞き取りを発表し、マレーシア国立文書館に収蔵されたそれが一連のムソビシ時代の口伝情報をも含む史料として一定の信頼がおけるものである。とはいえ、村落の立場からこの時代の出来事に目を配った研究は殆どなかった。

近年、マレーシアのクダーマレー民間人の間で、自らの祖先や村の起源に関わる情報収集と民衆による歴史伝承をネットで公開する試みが増えており、なかにはEICが把握しきれなかった、あるいは把握する必要がなく文字記録として残っていない伝承が祖先の墓誌や言い伝えとして再発見される。ときにそれは史実を逸脱した突飛な結論に達する場合もあるが、むしろクダーマレー人民衆の持つ民間の歴史認識を表すという面で興味深い情報である［黒田 2019］。

タイ語論考では、19世紀半ばに編纂された各地の地方年代記類の記述や、『ウドムソムバット（Luang Udom Sombat）書簡集』の冒頭にDamrong 親王が述べたクダー占領期に関する論考がタイ側の基本的見解である。クダー側とは事件の原因や解釈が異なるが比較する視点は十分ではない。タイ南部といえば反シャム抵抗の歴史の長い深南部の旧パタニ王国地域の近年のテロ再発について注目があつまっているが[3]、パタニと隣接しながらムソビシに至るまで反シャム的運動の記録がないクダーにはあまり興味を持たれていないのが現状である。

Ⅱ．18世紀後半のマレー半島中部－アユタヤ朝崩壊

1．ビルマの攻撃とアユタヤ朝の崩壊：1768年

シャム・アユタヤ朝は16世紀以来英ビルマ戦争の開始（1824）まで、絶え間なくビルマの攻撃に悩まされてきた［Damrong 1977］。アユタヤ朝がビルマの支配下に置かれ、その後ナレスアン王によってビルマ支配から脱した後を後期アユタヤ期とよぶ。1594－1604年の戦いでアユタヤは下ビルマの港市、テナセリム（Tenasserim）やタボイ（Tavoy）などインド洋岸の港市の支配を取り返し、アユタヤはマレー半島の両岸にマレー系朝貢国群、パタニ（Pattani）、クダー、クランタン（Kelantan）などとの関係を持ち、東西交易とつながる巨大港市となって栄えた。これはリードのいう「東南アジアの交易の時代」［Reid 1990］の後期に相当する。17世紀はインド洋方面からの交易が盛んでペルシャ系商人や西欧勢力が商館拠点の許可を求めた。

アユタヤを中心とする交易網を構成するマレー半島部の主要な港市群は以下からなっていた。インド洋側では「タラーン国及び西海岸８国」（以下タラーン港市群）[4]［黒田 1991］やシャム朝貢国のイスラーム国家クダー、東海岸側では軍事交易拠点でもあるナコンシータマラート（略称でナコンが転じてLigorと呼ばれる。漢籍や和書では「六崑」）や、ソンクラー（Songkhla、Senggora、または「宋卡」）、朝貢国でイスラーム国家のパタニ（漢籍・和書で「大泥」）、）等が海路と陸路により、アユタヤにつなぐ交易ネットワークを形成していた。

だが1759－1760年にビルマのアラウンパヤ王がアユタヤへの攻撃を再開し、1765－1767年にはシンビューシン王がアユタヤより下ビルマのテナセリムを奪い返した。そして、1767–1768年にはアユタヤを陥落させ、アユタヤ朝は崩壊した。

アユタヤの崩壊はマレー半島港市のネットワークにとってはハブとなる中心港市を失ったこと

[3] タイ南部の研究は近年タイ国深南部の旧パタニ王国地域のマレームスリムの問題に集中している。パタニはシャムとの長い朝貢関係の中でたびたび反シャム反乱を起こしては鎮圧され，シャムの体制への同化を言語的，宗教的にも拒んできた経験を持つ。パタニの現代に至る抵抗の歴史については既に公刊された著者の論を参照されたい［黒田 2012］。

[4] タラーン港市群はシャム中央に直属するインド洋側の多島海の小港市群で「タラーン国以下全８地方国（Muang Thalang Than pet huamuang）」と記される。現在のプーケット島にあるタラーン（Thalang ）国とプーケット（Phuu-ket），半島部のタクアパ（Takua-pa），タクアトゥン（Takua-thung），パンガー（Phagnga），クルット（Khrut），クラ（Khura），クラ-（Kraa）を指す。［黒田 1991］

になる。ナコンは即座に自立を宣言し自らを中心としたネットワークを半島の東西に伸ばして交易網を確保し、パタニ、クダーなどのマレー系朝貢国はシャムの朝貢から解放されたと見なした。

しかしながらビルマ軍はそれ以降もマレー半島部に侵入を繰り返し、ナコンやタラーン港市群はビルマの進軍情報を警戒し、また戦乱と疫病の流行を恐れた民衆が南下移動し、広範囲にわたる土地の放棄、荒廃が見られた。

2．シャムの復活

シャムではタークシンがトンブリー朝を建て（1767－1782）、チャオプラヤ川下流のトンブリーを王都とした。彼は一代15年の間にアユタヤ末期の大部分の勢力範囲を回復したが、その後民心を失って処刑され、その後チャクリー将軍がトンブリー対岸のバンコクを王都とし、ラタナコーシン朝をたててラーマ一世として即位し積極的にアユタヤ旧体制への回復を図った。

アユタヤとトンブリー朝やラタナコーシン朝の違いは、王都再建のために南シナ海の華人ジャンク船による交易収入をより重視した点である。シャムは「暹羅」の名で歴代の中華王朝に朝貢し、正式な朝貢貿易の他に18世紀から19世紀にかけては盛んに「私貿易」をおこなって、豊富な米を中国南部に送り莫大な収入を得ていた。18世紀以来華人交易が重視されてはいたが、トンブリー朝以降その結びつきはより強くなった。タークシンは潮州出身の華人の血を引きタイ人官吏の養子となってアユタヤでタイ人官吏としてのキャリアを積んで、王となってからは鄭信の名で中国に朝貢した。華人系乗組員とジャンク船による南シナ海への交易船は飲料水の補給や貨物の積み込みなどでナコン、ソンクラー、パタニなどを経由して中国沿岸に向かった。

このため、トンブリー朝以降のシャム王権は華人交易者と中央王宮、地方政権における華人の官吏、王宮との婚姻による繋がりがいっそう顕著になった。

タークシン王の処刑後、ラタナコーシン朝のラーマ一世はアユタヤ体制の継承者であることを示すために広く遠征を行って国内を安定させるとともに、三印法典の整備や仏教寺院を建立し、仏教王権としての威信を強調した。マレー半島部においても1785年にはマレー系の元朝貢国（Prathetsarat）群に朝貢の復活を要求し、朝貢を拒否したパタニに遠征してスルタンを捕らえた。この結果様子見をしていたクダーやトレンガヌはシャム・ラタナコーシン朝への朝貢を復活した。マレー系朝貢国は中央宮廷への参内と金銀樹（マレー語で Bunga Mas dan Perak、タイ語で Thong Mai Thong Ngan）と貢納品を３年に一貢する制度が義務づけられた。金銀樹ことブンガマスの貢納はアユタヤ時代にも送られていた朝貢の印である。

3．南部諸港市の抗争－ソンクラーとナコンシータマラート

(1) ムスリム勢力から華人勢力への交替とソンクラー華人の台頭：1688－1791

港市国家とは、交易品に依存するが故にその時々の交易流行品によって港市そのものが興隆衰亡する傾向を顕著に持つ。マレー半島中部港市では17世紀中頃まではインド洋からの商人の胡椒を目的とした来港が顕著で、ペルシャなどのムスリム商人の活躍がめだったが、17世紀末以降は華人商人による南シナ海、中国南部への米の輸出が主となり、交易品の交替は半島港市群の勢力図を塗り替えた。

タークシン王が王都の速やかな再建のための清朝との交易において重用した華人商人の一人が、ソンクラーに1750年に来た福建華人呉譲（Wu Hieng）である。呉譲は農作物生産を経て成功し、タークシン王がナコンを制圧したときに臣従を誓って燕巣税徴税吏に任じられた。その後、タークシン王は17世紀にソンクラーに移住してきたペルシャ系ムスリムのスルタン・スライマン一族をソンクラー国主から解任し、呉譲の長子ブンフイ（Bun Hui: 文輝）は1775年にはプラ・ソンクラー（Phra Songkhla）の称号を得て、ソンクラーの国主となった。『ソンクラー年代記：

タイ史料集成 no.53』によれば、その二年後、ナコンがソンクラーの正丁を無断で使役したことからナコンとソンクラー間に諍いが起こり、タークシン王はソンクラーを中央宮廷直属の地方国に昇位させた。タークシン王はナコンを制圧することはできたものの「辺境の国」として朝貢国扱いにしており、ソンクラー呉氏政権を王都政権と親しい華人交易拠点にしたと思われる。この華人政権に対しては元のソンクラー国主一族、スルタン・スレイマンの子孫から反発があり、1786年に乱がおこっている［黒田 1985：104］。

ラーマ１世は1786年にはソンクラーを一旦王都直属の３級国（Muang Trii）とした。ソンクラー呉氏国主はパタニと接する小港市チャナ（Cana）、テーパー（Thepha）に華人親族を国主として送り込んだ。朝貢国パタニとビルマの不穏な状態に警戒は絶やすことはできなかったが、1791年にパタニで起こったムスリムによるト・サヤット（Tok Sayat）の乱が平定されるとソンクラーは１級国に昇格された。ソンクラーはチャナの副長官であった華人系の Kwansai の一族をパタニに移住させ、錫鉱山の開発に当たらせ、その利益は長らくソンクラーのものとなった。

ラーマ一世がソンクラーを昇位させナコンと同等の１級国にしたのには、ナコンをアユタヤ以来の軍事と交易拠点として重視する一方、宮廷政治においてはナコンに対抗できる勢力を作っておきたかったからと考えられる。今も航空機で上空から眺めると、ナコン、ソンクラー、パタニの各港は一望できる近さにある。南シナ海交易の隆盛に従って、ナコンとソンクラーのライバル関係も顕著になった。

もっともその関係がよく表れるのは監督国としての朝貢国への干渉力である。従来ナコンはマレー半島部の全朝貢国の監督国であった。朝貢国は３年に一度金銀樹と貢納品を王都に運ぶが荷役象の隊列で監督国に赴き、その先導によって王都まで船で向かい王に拝謁した。また朝貢国内での内紛や権力闘争においては監督国の仲裁や介入により解決が図られた。前近代のシャムの支配制度では基本的に中央宮廷は朝貢国の問題に関与せず、また１級国は中央宮廷に対して毎年の王都での忠誠儀礼参加とスアイ（Suai）やアーコン（Aakon）と呼ばれる物納税を規定通り納める義務がある。ビルマやパタニなどの戦乱が予想されるマレー半島からはしばしば中央に納める物納税（燕巣など）を対価として西欧からの大砲、銃などの購入が指示された。なお、宮廷と親密な関係を築くには地方領主から王や中央高官への娘の輿入れなど、個人的な関係が必要であった。

ナコンとソンクラーはインド洋側への横断路を持っていた。1822年の Crawfurd の記録では、マレー人交易商人 Juragan Soliman の言としてインド洋側のトラン（Trang）からナコンへは象で３日、クダーからソンクラーへは５日の行程である。ソンクラーとクダーの王都アロースター（Alor Setar）を結ぶ道は「サイブリー街道」（Saiburi とはタイ語でのクダーの呼び名）と呼ばれるが、ナコンとトランを結ぶ道よりも治安が良く交易路としてよく用いられていた［Crawfurd 1987（rep）：14］。

ナコンとソンクラーのライバル関係について19世紀半ばの Damrong 親王は次のように書いている。

> プラヤーナコンシータマラートとプラヤーソンクラーはすべての点において互いに好意を持たなかった。というのも両者は国境を接しており、以前はナコンが唯一（南部で）第一の権力をもった国であったが、ソンクラーの方が海路交易に向いた場所の河口にあり、パタルン国やナコンシータマラート国からの物資が輸出されたこと、ソンクラー国主が商人の一族であり、利益を産むのに長けていたことなどがある。ソンクラーは近隣諸国を良く治め、住民の土地を守っていた。要するにソンクラーが大国となり、ナコンシータマラートと競うべき責務を獲得して以来、ナコンシータマラートの側では権力を維持し、利益を得る道を閉ざさ

れたのである［Damrong、1963：121］。

中央宮廷の思惑としては、ナコンとソンクラーという二つの１級国を1791年において、軍事的能力に勝るナコンには西方のビルマへの防衛を中心に、ソンクラーには華人国主のネットワークを生かして、交易収入を期待したと見られる。

(2) ビルマによる「タラーン港市群及び西海岸八国」の破壊：1809－1810年

ビルマはラタナコーシン朝に対してもしばしば攻撃を行った。マレー半島西海岸のタラーン港市群はシャムの王都直属の交易中心でインド洋交易を担っていた。タラーン港市群からは細い山道のカオソック（Khao sok）交易路で半島を横断してシャム湾へ至りシャムの主要なインド側交易港であった。タラーン港市群は錫も産し、英国東インド会社がクダーからペナン島を占領租借した1786年以降、タラーン港市群とペナン間は錫交易などの流通が盛んになった。十分な防衛力と豊富な交易品を背景とした新型の港市ペナンの存在は、マレー半島西海岸の各港市の注目を集め、交易商人だけではなく、沿岸港市、そしてビルマをも引きつけた。

Bassett によれば、この地域の商人はインドの綿とアヘンを用意して、ペナンで会社のアヘンと錫とのバーター交易をしばしば行った。そして会社からもっとも多くアヘンを購入していたのはシャムであった［Bassett 1989：641］。アヘンはシャムにおいて禁制品だが、1792年のシャムの記録にはトランで吸引者が絶えないと報告され、1806年のナコンへの命令書には、アヘンの交易、吸引を厳禁する指示がある［Krom Simrapaakon、1963 b］。

1790年代のタラーン港市群とペナンとの間で行われたタイ語交易資料では英国船がタラーン港市群に求めたのは殆どが錫である。その対価としてシャム側が求めるのは、インド、スマトラの布類、アヘンであり、銃砲類である［Suthiwong 1957：60］。1790年前後のタラーン港市群総督からの手紙によれば、シャムが購入に意欲的なのは大砲の類であった。シャム中央政権は１級国ナコンに命じて軍備を充実し、公的税金にあたる錫を財源として、ビルマ戦に備え、大砲弾薬の購入を急務とする布告を出していた。ナコン国主は南部地域の軍事総帥でタラーン港市群を通じこれらの武器弾薬を購入する任務を負い、シャム湾側からの横断ルートを握っていた。タラーン港市群と、武器を提供する交易港ペナンは、海路でわずか1日の距離で通行可能であった［謝清高、1820吉徳國条］。

1785年、ビルマ軍はタラーン港市群、ナコン、ソンクラー、クダーに侵攻し、それまでビルマの脅威を直接経験したことのない地域の国主や住民は恐怖を身近に体験した。ビルマ軍はシャムの王都だけではなく、マレー半島西側のメルギィ（Mergui)、テナセリムから出兵してラノーン(Ranong)、チャイヤ Chaiya）を陸路から攻め、また海路からタラーン港市群を攻めてこれを占領し、ナコン軍を撃ち破って、パタルンからソンクラ一領内へ敗走せしめた。王都からの援軍がシャム湾側から到着し、ビルマはテナセリムまで撃退したが、ビルマの攻撃で拉致された住民も多く、再度の攻撃の予感に地域住民は大きな不安を抱いた［黒田 1991：75］。

タヴォイ、テナセリム等におけるビルマ海軍の動向は、南部地域全体の国防総督であるナコン国主に逐一報告され、敵軍の集結が確認されるとシャム側もただちに防備体制をとった。ビルマはその後、1795年、1809年から1810年にかけタラーン港市群を主たる目標として攻撃しシャムに打撃を与えた。その後もビルマ軍の集結情報は軍船が集まっているというだけで南部のシャムの各地方国を不安に陥れ、ビルマの攻撃を警戒したナコンはしばしばトラン付近に軍を駐屯させた。ビルマの軍事行動はタラーン港市群での交易によってシャムが得ていた武器の供給を断つためであったといわれている 。

1809－1810年の攻撃はシャムにとって深刻な打撃となった。すでに1785年の攻撃でタラーン港

市群とシャム湾を結ぶ陸路の近くの集落の住民はビルマ軍の捕虜になり、あるいは逃亡して人口が減少していた。また隊商が途中で盗賊あるいはビルマ軍におそわれて、その際放棄された王室向けの貨物を王の官吏が回収することもままならず、治安が悪化していた［黒田 1991：76］。1809－1810年の攻撃ではプーケット島が奇襲を受けて占領され、それを奪還するために、ナコン、ソンクラー、パタルンの各地方国軍に加えて、王都からも軍隊が派遣された。また、1803年にシャムの威光を借りてクダー国主になったクダー・スルタンもシャムの要請をうけて戦闘に加わらざるを得なかった。クダー軍はナコン軍、ソンクラー軍とともにトランに駐留したが、この事件以降トランはシャムの防衛基地となった。

シャムは１年余りの断続的な戦闘で辛くもタラーン港市群を奪還することができたが、作戦に参加したクダーのマレー語の戦闘叙事詩である『シャイール・スルタン・マウラナ（Shair Sultan Maulana）』の叙述によれば、「すべての村々の家畜や作物は食べつくされ、破壊されつくされ、寺以外のものはすべて灰塵に帰している」状況で、「とても人のすめるようなありさまではなかった」という［Skinner 1985：24-41］。また1790年代年間500トンをペナンに提供できた錫鉱山が荒廃し、年間20トンの産出がやっとという状態になった。戦乱によるさらなる人口の減少も深刻で、しかもビルマの再攻撃の可能性があったため、プーケット島北部の「タラーン港市群及び西海岸八国」総督の居住地であったタラーンの町（現バーン タキエン）は放棄され、残った住民は半島側のパンガー（Phang-nga）に強制移住させられ、新しい集落を与えられた。

シャム王都政権は、タラーンの復興には数年かかると判断した［Suphaphorn 1976：129中の『小歴1174年資料』No.3］。タラーン港市群の港市機能は停滞し、一時的にペナンに取って代わられることになった。タラーンと連関するペナンもこのとき錫の質の低下からその勢いに陰りをみることになる。タラーン港市群の荒廃は1811年から1814年までのペナンの発展の阻害要因の一つとなるも、バランス的にはペナンへの交易集中を産むことになった。また住民も海路、陸路をつかってさらに南下し、ムソビシの時代にはかなりの人数が「安全な」英国東インド会社領（会社は1801年にペナン対岸の Sebrang Perai=Wellesley 地方をさらにクダーから入手していた）内まで移住した。

(3) ナコンシータマラート国主ノーイの登場

発展するソンクラーに対し、ナコンはアユタヤ末期から国主の交替や、対ビルマ攻撃への対応などで建て直しが必要だった。

タイ史料によると、アユタヤが崩壊する直前のビルマの攻撃時、ナコンには総督が不在であった。アユタヤ宮廷からとがめをうけて申し開きのためにアユタヤに向かったとされ、そのまま行方はしれないとされている［Stuart 2001：168］。

アユタヤ崩壊当時にナコンの留守居をしていたのは副官（Phra Palat）のヌー（Nuu）[5]であった。ヌーはアユタヤ崩壊の報を聞いてナコンを中心とする港市ネットワークを確保するために出兵し、独立を宣言したと言われる。ヌーの出自は詳しくは不明であるが、アユタヤから派遣されナコン貴族の妻がいた。

タークシン王は1767年ナコンに遠征してこれを制圧し、ヌーは捕らえられてトンブリーに送られた。ヌーはシャムへの反乱の意図はなかったとみなされ、トンブリー宮廷で役職をしばし勤め、７年後にナコン国主に復帰した［Bua na Nakhon、1963：103］。マレー半島部におけるナコンの

[5] シャム人は正式名の他に幼名のあだ名があり一般にはその名でよばれる。官吏や領主は位階により何度も錦賜名が変わり、世代が変わると同じ錦賜名を授かったりするため、タイ史料においてもそれを区別するために幼名が付されて記録される。ナコン国主はラタナコーシン朝では世襲で親と同じ錦賜名を受け継いだので、本稿ではヌー（Nuu：ネズミの意味）から女婿のパット（Phat：繁栄の意味）、ノーイ（Noi：チビの意味）の名で区別する。

存在はタークシン王も侮れない影響力をもっていたためと考えられる。その後1784年にヌーの女婿のパット（Phat）がナコン国主を継いだ。

国主パットは当時のナコンの責務、対ビルマ戦用の大砲や銃の購入と沿岸での警備、さらに反乱の兆しがあるパタニの監視、クダーとクランタンの朝貢遂行のための業務が多忙となって手一杯になっていたため、1791年に中央宮廷はパタニの監督国の権限をソンクラーに変更した。ソンクラーの呉氏国主のブンフイ（Wu Bun Hui 呉文輝）の力が増して、ナコンとソンクラーのライバル関係は激化した。1804年には西海岸のタリボン（Talibong）島の領主とパットの間の確執が明かになり、タリボン島の領主は管轄下のトランをソンクラーの属国（muang khun）に差し出すという事件まで起こった。

ところで、前国主ヌーの娘は先にタークシン王の後宮に差し出され、タークシン王からパットの妻として与えられたとき既に妊娠２ヶ月であったと伝えられる。そのため1776年８月27日に産まれた息子ノーイ（Noi）は「タークシン王の息子」と呼ばれた。ノーイは当時の地方領主の息子の典型的キャリアを経る。まず王都宮廷で侍従（Mahat Lek）の地位に就き、ついで1806年に「父」ナコン国主のパットの補佐役としてナコンに戻り、1811年８月14日にナコン国主の任務を引き継いだ［Krom Simrapaakon、1963a］。老齢の父の引退が理由だが、ノーイは国主就任当時35才前後であり、対ビルマ戦への人事の若返りと解釈できる。

ノーイがナコン国主に就任して程なく1811年10月21日にナコンの官吏登録簿がもたらされた［Krom Simrapaakon、1963c］。これは1811年のナコンシータマラートの領域と副国主以下のナコン中央官吏からナコン治下の地方官吏に至るまでの位階（サクディナー[6]）が詳細に記された資料である。この官吏登録簿は当時のナコン国主の地方宮廷の規模を示す。国主ノーイの位階サクディナー数は10000で、ナコン国府中枢の主要官吏は30名である。当時のナコンの領地は現在のスラタニ（Suratthani）、ナコン、トラン、クラビ（Krabi）とソンクラーのサティンプラを含む地域である。

この登録簿にはナコンの具体的な責務が記されている。「徴用部」は軍用物資、王都に貢納する金銀樹、貢納品の調達を任務とする。特記すべきはそのためにナコンの直接統治下にはない王都直属地、すなわちタラーン港市群の一部であるタクアトゥン、タラーン、タクアパ、タートゥン（Thaathung）等の国から錫、銀を指定された年額で徴収する役目がある［黒田 1987：52］。ダムロン親王の解釈では、この時代のタラーン港市群は中央直属の地方国として半島横断陸路（カオソック交易路）の関所ともども中央より派遣された特任官吏（カールアン）の統治下にあった［Damrong 1963：144］。しかしながら、ナコンが以上の地域に徴用権利を有していたことは、既に国主就任の時点でノーイの公的なタラーン港市群への影響力が存在し、ノーイの国主時代にパンガーやタクアパなどの国主に彼の息子らが次々任命され、公的私的なナコンの勢力拡大傾向を示唆している。

Ⅲ．新勢力の登場と港市の再編成 - クダーを巡る諸勢力の動き

１．英国東インド会社のペナン獲得とクダーとの交渉

英国東インド会社（EIC）はヨーロッパの社会情勢を背景として軍事力を強化し、1757年６月23日にはインドのベンガルにおける覇権を確固たるものにした。

1770年 EIC のベンガル政庁はベンガル湾の制海権を確立し、軍港の根拠地を求めていた。コ

[6] サクディナーとは官吏に与えられる水田所有権を意味し、封建制に類似する。「俸禄」にあたるものであり、その階位を表した。

ロマンデル海岸のモンスーンの変化に対応できる風待ち港であり、海軍のための造船能力があり、オランダ勢力の及ばない地域であることが条件で、その候補はアチェとプーケット（Jung Ceylon）、クダー海岸であった。この三つの地域は既に英国のカントリートレーダーが立ち寄る場所である［黒田 1991：72］。

プーケット島の租借交渉は決裂し、1771年にフランシス・ライトがペナン租借の交渉に入った。ライトは軍事拠点よりも商業根拠地としてペナンに期待しておりこれを強く推していた。しかし、ペナンはマラッカ海峡北部交易圏に属しており、中国方面との交易中心としては最適とは言えなかった。マラッカ海峡の海賊やオランダの干渉を避けるためにはペナンから半島横断陸路によってシャム湾の華人交易網と接するしか無かったからである。そのため後に1819年にラッフルズがシンガポールに根拠地を置くと、船による物流はシンガポール経由が主力を占めるようになる。また、マラッカで現地化して手広く交易を行っていた有力なプラナカン商人や華人系商人達はペナンの根拠地ができるとペナンに移住してきたが、シンガポール根拠地が出来るとシンガポールへも移っていった。

ペナン租借を巡るクダー側との最大の問題は、クダースルタンとの間で完全な合意がなされないまま状況が進行したことである。ペナン租借の代償を年間30000ドルとしてクダーに支払うことについては問題はなかったが、当時のクダーのスルタン・アブドゥラ・ムカラム・シャー（Sultan Abdullah Mukarram Shah）はシャムとビルマという強国の圧力を不安に思っており、英国がクダーを保護するという条件にこだわった。ライトはその条件を承諾したが、英国本国はそれを承諾しなかった。

曖昧な状況のまま、EIC は1785年７月17日にペナンへ上陸し事実上これを英国の支配下に置いた。またクダーへの年金についても、6000ドルと下方修正された。また英国で1783年に成立したピット法によって、EIC は英国政府の管轄下に置かれ、英国政府の認可なく戦乱に関わる契約をむすぶことができなくなり、クダースルタンがその後も執拗に隣国の脅威からの保護をせまり続けたが、援軍の保障はされなかった。業を煮やしたクダースルタンはリアウからの兵士を招いてペナンに圧力をかけたが、ペナンの武力行使に敗北し、英国に屈服するしか無かった。

その後ペナンは対岸のスブラン・プライ（Sebrang Prai）地区を食糧補給等の目的で1801年にクダーから借り受けてウェルズレイ地方と名付け、ペナンとウェルズレイ地方を会わせた租借年金として10000ドルがクダーに支払われることになった。

２．シャムとの朝貢再開－スルタン・アフマッド・タジュッディン・ハリム・シャーⅡのクダースルタン即位

シャムの脅威をペナンに訴える一方で、クダーはまたシャムの力をも借りていた。1786年にシャムの朝貢要求を受け入れたクダーは１級国ナコンの監督下に置かれたが、クダースルタンは、ソンクラー領内のパトン（Phatong）とカラム（Karam）の土地は元はクダーの土地であると当時の監督国ナコン国主のパットに訴えた。パットは、ソンクラーとクダーの両者に書状を送り、王都でラーマ一世の裁定を仰いだ。パトンとカラムはクダーからソンクラーに通じるサイブリー街道の拠点である。ラーマ一世はこの地がクダー領であることを承知しながら、ソンクラーへの先の戦いでの報償として両土地をソンクラーに与えた［黒田 1985：112］。

スルタン・アブドゥラ・ムカラム・シャーが1797年に亡くなると、スルタン・ジァッディン・ムカラム・シャー２世（Dziaddin Mukarram Shah II）、がスルタン位をついだが、彼は1800年６月６日にペナンとの友好協力をむすび、さらにペナン対岸のウェルズレイ地方のに英国への租借を承諾しペナンとあわせて年間10000ドルの年金を確保した。しかし、その年金の分配を巡ってスルタンの親族間で係争が起きた。

タイ史料ではパゲーラン（Pangeran= 皇太子）と呼ばれる前スルタンの息子は、自らがスルタン位を継ぐべきと考え、個人的に親交のあったソンクラー国主を介して王都宮廷に向かい、プラヤーサイブリー（Phraya Saiburi）、即ちクダー国主としての地位を正式に認められた。1803年彼はソンクラー軍5000人を伴ってクダーに戻り、叔父を廃位してスルタン・アフマッド・タジュッディン・ハリム・シャーII（Sultan Ahmad Tajuddin Halim Shah II）として即位した。歴代のクダースルタンの中でシャムの力を背景として誕生した始めてのスルタンである。

英国の租借年金の分配とペナンの発展によって交易中心がペナン側に集中したことは、クダー内の領地の価値を変えた。クダーは王都のアロースターにスルタンが居住し、それに次ぐ地位のラジャムダ（Raja Muda）の領地はサトゥーン（タイ語読みではSatun: マレー語ではSetul Mambang Segara）である。またランカウィー（Langkawi）島はクダーの海軍拠点であった。ところがペナンとウェルズレイ地方に交易が集中するようになり、スルタンの一族には富の分配での不満が生じた。特にスルタンの補佐、副国主ラジャムダのビスヌ（Bisnu）は自分に与えられた北部の領地サトゥーンからの収益に不満でより南への領地替えを望んだが、拒否されたのでスルタンと対立し、トランにまで拠点を拡大していたナコンシータマラートに近づいた［Tunslaruk、1977：77内の引用『小暦1173年文書』２］。

Ⅳ．ナコンシータマラートの勢力拡大

１．ナコンシータマラート国主ノーイの西海岸への勢力拡大策

ソンクラーの有力国主であったブンフイが1811年５月27日に亡くなり、甥のティエンチョンが跡を継いだのとほぼいれかわるように、ナコンでは国主パットが引退し、副官であったノーイが1811年８月14日にナコン国主となった。ペナンのEIC官吏から「リゴールのラジャ」ともよばれたノーイは、傑出した政治家であり、またシャムの中央宮廷にも強い影響力をもっていることで知られた。前述したようにタークシン王の息子として知られ、シャム王室もそれを認めている。ノーイは当時の地方領主の息子たちが経験するキャリアを経た。すなわち、中央王宮で侍従（Mahat Lek）として出仕し、その後ナコンに戻って、1806年副国主（Palat）となり、その後1811年８月14日にナコンシータマラート国主となる。彼は最高位の地方国としての強力な権限が保証されていた。彼は中央宮廷においても副王（Wan Na）や南部担当大臣であるカラーホーム（Kalahom）とのつながりが深く、出自だけではなく、王都宮廷の政治を二分するとまでいわれた政治的手腕を振るった。ナコン国主ノーイはその在位1811－1839年の間、ライバルソンクラーを押さえて、積極的にマレー半島の西海岸に勢力拡大をはかった。

(1) タラーン港市群の復興策

王都宮廷とナコンの双方は、まず1809-1810年のビルマの攻撃で破壊荒廃したタラーン港市群の復興を急いだ。タラーン港市群は王都宮廷の直轄地域だが、ビルマの再度の攻撃に備えた大砲や武器を充実させるための責務と資金はナコンが王都に納めるべき燕巣や錫などの物納税が充てられた［ Krom Sinlapakon　1963a : 43］。

国主ノーイはタラーン港市群の経済的な再建計画にも積極的で、自分がその総責任者に任じられるよう王都宮廷に働きかけたが、宮廷はノーイに新たな権限を与えることを渋り別の人物を任命した。しかしその官吏はノーイの圧力を恐れて任地に出向かず［Tunsulaluk　1978:129　内引用『小暦1175文書』:4］　結果的にノーイがその任を得た。ノーイは自分の関係者を多く送り込み、タラーン港市群のうち王都宮廷の意向が反映されるのはタラーン港市群8国のうち4国だけであったという。荒廃したタラーン島の住民はパンガー（Phangga）に移住させられ新たな錫資源の提供地となり、ノーイの息子たちがその地の要職についた。

(2) トランの開港と開発　1811－1812年

トランは1811年にナコンの属領（muang khun）として与えられた。トランはそれ以前はクダーの領地と EIC が認識していた場所である。ここを監督する官吏のサクディナー数は1600で、ナコン治下ではナコンの中央官吏を除くと最も高く評価されている。トランが重視されたことの証左でもある［黒田 1987：62］。

トランの価値は陸地というよりその周辺の多島海にあった。プーケット島以南の多島海はマングローブで覆われた海岸線と石灰岩の島々からなりオラン・ラウト（Urak Lawe）の活動域であるが、陸地においても海においてもその帰属は曖昧であった。17世紀以降オランラウト達がより北部に移動したため、クダーが18世紀半ばにタラーンから以南のトラン、サトゥーン、ランカウィー島の制海権を獲得したことで、トランはクダー領と認識されていた［Anderson 1989：140］

タイ資料では、18世紀末ごろのトランは物納税の燕巣と硝石（火薬原料）の提供地としてしられたが、地域の中心はトラン河口沖のタリボン（Talibong）島にあり、土地の支配者はタイ名の称号とマレー名を持ち、海民オランラウトの部隊[7]を有していた［Tunsulaluk 1978：77、Skinner 1985：88-90］。1810年にはトランはタリボンの属下にあり、その帰属はナコンとソンクラーのあいだを揺れ動いた［黒田 1999：84］。1811年にトランを公的に獲得したナコンはタリボン周辺の島々を燕巣採取のために年6000から7000ドルでクダーに貸した。またシャム王都宮廷からの要求はあくまでトランの軍港としての整備であった。ビルマとの戦いでこの地域のオランラウトを含むムスリムたちが異教徒への協力を拒んだために独自の拠点が必要であったとも言われる。

トランの軍港整備の一方で、ナコンはこの港を商港として非公式に利用しており、トランには1812年に３艘1814年に２艘1816年にインド方面からの商戦が入港し象牙を売り錫と交換していった。［Tunslaruk 1977：82内引用『小暦1184年文書』：3、『小暦1173年文書』：3、『小暦1176年文書』：2、『小暦1178年文書』：3］トランは公的にはビルマ対策の軍港であるが、ナコンの私的交易にも使用され、ナコンはクダーに接する半島西海岸の拠点を入手したことになる。1832年までにトランでは軍船200隻が造船された。タラーンの復興への介入、トランの軍港化によって、ナコン国主ノーイの関心はペナンへつながるルート確保に向かっていた。だがペナンは福建系華人交易者の人脈でソンクラーの福建華人国主とも結びついており、ノーイはソンクラーの影響を排除すべく王都宮廷にも働きかけた。

(3) クランタンの監督権確保（1813）とペラ（Perak）への朝貢要求（1816－1816）

ノーイは1813年には、東海岸の朝貢国トレンガヌと仲違いしたクランタンと、クダーの監督権をソンクラーから奪いとることに成功した。ソンクラーを封じノーイは本格的にクダー、ペラへの介入を計画する。ノーイは1813年ペラをシャムに朝貢させる計画を王都宮廷に奏上した。ペラは錫の豊富な地である。ナコン軍は大軍をトラン港に集結させ、ペラが朝貢を拒否した場合にはただちに出航し軍隊を派遣できる体制を整えた。クダースルタンはクダーにナコン軍が侵入することを懸念し、日々ペナンの EIC に保護を訴え続けていたが、EIC からはなんの確約も得られなかった。スルタンは、ナコン軍がクダーを通過する場合の行軍への糧食提供等、クダーへの被害を恐れた。それでナコンに代わってシャムへの朝貢をするようペラを説得すると申し出た［Bonney 1971：129、Anderson 1989：84］。ペラがシャムへの朝貢を拒否したので、クダー軍はペラに出兵しこれを圧倒した。1817年にはペラはクダーの説得を受け入れ、1818年にはペラから

[7] クダーは17世紀以前には戦士としてこの地域のオランラウト軍の強力を得ていたが、17世紀のイスラーム化勢力の流れの中で、ムスリムになることを嫌った一団はより、北部に移動し、アンダマン海岸の Moken, Mokren などとして生きたと言われている。

シャムへの最初の朝貢使節が金銀樹と錫などの貢納品を携えてシャムに向かった。
（Part.2に続く）

参考文献

１）タイ語文献

Damrong rachanuphap, Somdet Caophraya, 1963. Phraratcha Phongsawadaan krung Ratanakoosin thi 2（『ラーマ II 世王年代記』）, Bangkok, Ongkankha Khrusaphaa.

Damrong rajanubhab, 1977（reprint）. Thai-rop Phama（タイビルマ戦争）samnakphim klang Witthaya, Bangkok.

Bua na Nakhon, 1963. Phongsawadan muang Nakhon Sithammarat: Prachum Phongsaawadaan No. 53.（『ナコンシータマラート国年代記』タイ史料集成 No. 53）, Ongkaankhaa Khrusaphaa, Bangkok.

Krom Simrapaakon, 1963a. Phongsawadan muang Nakhon Sithammarat: Prachum Phongsaawadaan No. 2.（『ナコンシータマラート国年代記』タイ史料集成 No. 2）, Ongkaankhaa Khrusaphaa, Bangkok.

Krom Simrapaakon, 1963b. Phongsaawadaan muang Thalaang: Prachum Phongsaawadaan No. 2.（『タラーン国年代記』タイ史料集成 No. 2）, Ongkaankhaa Khrusaphaa, Bangkok.

Krom Simrapaakon, 1963c. Thamniep Khaaraatchakaan Nakhonsiithammaraat, Phrachum Phongsaawa daan No. 73,（『ナコンシータマラート官吏登録簿』タイ史料集成 No. 73）, Bangkok.

Suphaphorn Tunslaruk, 1977. "Botbaat khong Caophrayaa Nakhonsithammaraat（Nooi）thii mi too Ratthabaan klaang le Huamuang Phaak Tai nai Ratthasamai Phrabaatsomdet Phra PhutthaleaklaanPhaalai le Phrabaatsomdet Phra Nangklaocaoyuuhua（The Role of Chaophraya Nakhon si Thammarat in relation to the Central Government and Southern Provinces of Siam during the Reigns of Kings Rama II and Rama III）, unpublished thesis of Chulalongkorn University, Bangkok.

Suthiwong Phongphaibun（ed.）1957, Eekasan Huamuang pakstahi（『南タイ史料集』、Sinakarinkrinsawirot Songkhla.

Udomsombat（Can）, Luang 1972. Cotmaai Luang Udom Sombat（『ウドムソムバット書簡集』、Bangkok.

２）マレー語文献

Ismail Haji Saleh, 1977. Siri Perang Musuh Bisik dalam Warta Darulaman（ムソビシの戦い）. National Arkib Kedah, Malaysia.

Wan Yahaya, 1911. Salasilah atau Trikh Kerajaan Kedah（『クダー王家の家系』）, The British Malaya PressLtd, Penang.

３）英語文献

Anderson, John, 1824（rep 1989）. Political and commercial considerations relative to the Malayan Peninsula and the British Settlements in the Straits of Malacca -Considerations of on the Siamese Conquest of Quedah and Perak, MBRAS, Kuala Lumpur.

Anthony Reid, 1988. Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680: The Lands Below the Winds, Yale Univ Press, USA.

Basset, B.K., 1989. "British Country Trade and Local Trade Networks in the Thai and Malay States: 1680-1770", Modern Asian Studies, vol. 23, pt4, 625-643.

Bonney, Rollin, 1971. Kedah 1771-1821, Oxford University Press, Kuala Lumpur.
Crawfurd, John. 1828(1987 rep.). Journal of an Embassy to the Court of Siam and Cochin China, Oxford University Press, Kuala Lumpur.
GULLICK, J.M.1983. "KEDAH 1821-1855: Years of Exile and Return", Journal of the Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society Vol. 56, No. 2(245), 31-86.
Kubkua Suwannathat-Pian, 1988. Thai-Malay Relations: Traditional Intra-regional Relations from the Seventeeth to the Early Twentieth Centuries, Oxford Univ. Press, Singapore.
Reid. Anthony 1990. Southeast Asia in the Age of Commerce, 1450-1680: Volume One: The Lands below the Winds, Yale University Press
Skinner, C. 1985. "Battle for Junk Ceylon: The Syair Sultan Maulana, Foris Publication, Leiden.
Stuart. Munro-Hay, 2001. NakhonSri Thammarat: The Archeology, History and Legands of a Southern Thai Town, White Lotus, Bangkok.

４）和文文献

黒田 景子，1985.「ソンクラー国年代記訳注（上）」,『南方文化』，天理南方文化研究会，12巻，93 -114，天理 .
黒田 景子，1987.「『ナコンシータマラート官吏登録簿』について：19世紀南部タイの地方統治制度」,『大谷大学大学院研究紀要』，2号，37-63，京都 .
黒田 景子，1991.「タラーン港の破壊：ラーマ１世期（1785－1808）シャムにおけるマレー半島北部西海岸交易港群の役割」,『南方文化』，天理南方文化研究会，18号，56-81，奈良 .
黒田 景子，1999.「ナコンシータマラートの拡大政策：1811－1839」,『東洋學報』，東洋文庫，80巻 42号，1-29，東京 .
黒田 景子，2019.「コタムンクアンの主を巡る言説の変容 ; マレーシアの口承伝統における民間の歴史意識」,『鹿児島大学総合教育機構紀要』，
２巻，17-42
信夫 清三郎，1943（rep. 1968).『ラッフルズ伝』—イギリス近代的植民政策の形成と東洋社会（東洋文庫（123），平凡社 .

５）漢籍

謝清高，1820.『海録』.

Map.1　マレー半島中部

Era of "Musuh Bisik": the occupation of Kedah by Siam from 1821 to 1842 (part.1)

Keywords : Kedah, Nakhon Si Thammarat, History of Siam, History of Malay

Summary
This article covers the Kedah invasion and occupation period by Nakhon Si Thammarat, which began in 1821. This study compares and examines the descriptions of both using multilingual historical materials in Malay, English and Thai, and details the truth of the incident. The manuscript is divided into two parts because of the large amount of manuscript. The first half is described here.
Kedah is a port city-state on the Malay Peninsula and a Muslim state ruled by Sultan. However, it was one of several Malay port cities that paid tribute to the Siamese and Ayutthaya dynasties whose national policy was the principle of Buddhist rule. It is said that the period of Islamization and the beginning of tribute to Siam was probably the 15 century. The reason why Siam maintained Kedah as a tributary state was that this region, together with the Patani Kingdom on the east coast, was a base of East-West trade and an important trading network for Ayutthaya, a giant port city state. Nakhon Si Thammarat (Ligor) has been an important trading and military base since ancient times in the Malay peninsula of Siam, and played a role to supervise and monitor Malay tributary countries. King Taksin of Thonburi, who revived the Siamese dynasty after the fall of the Siamese Ayutthaya in 1768 by Burma, placed a family of Fujian Chinese merchants in Songkhla, with a view to reconstructing the country with an emphasis on the benefits of Chinese trade. Later, Rama I of the Ratanakosin dynasty restored the tributary relationship with Kedah and Patani, and promoted Songkhla to the same position as Nakhon Si Thammarat, emphasizing the trade income. As a result, they became rivals in trade and political strife within the Central Court of Siam. The dispute intensified over the rights to trade with a new port city, the British East India Company, based on Penang Island off the coast of Kedah.
On the other hand, by 1809, southern Thailand had been repeatedly attacked by Burma, and the Thalang port cities under the direct control of the central court suffered devastating damage. Noi, who took over as head of Nakhon Si Thammarat in 1811, ousted Songkhla, whose military power was inferior, and expanded his influence to include the cities of the Port of Thalang and Trang in search of trade rights leading to Penang. The most obvious interference is the occupation of Kedah. Nakhon Si Thammarat used the internal conflict of the Sultan family of Kedah to invade and occupy Kedah in 1821, and put it under direct control until 1842. (part.1)